HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	天塩、中川研究林におけるテシオコザクラ、オゼソウの分布調査
Author(s)	伊藤，欣也；高橋，廣行；早柏，慎太郎 他
Citation	北方森林保全技術，第33号，1-3
Issue Date	2016-03-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73005
Type	departmental bulletin paper
File Information	2014-33_1-1.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Ⅰ－１　天塩、中川研究林におけるテシオコザクラ、オゼソウの分布調査

伊藤欣也[1]，高橋廣行[1]，早柏慎太郎[1]，奥田篤志[2]，和田克法[1]，古和田四郎[1]，小池義信[1]，
椿本勝博[1]，大岩健一[1]，佐藤博和[1]，宮崎徹[1]，大岩真一[1]，岡翼[1]，菊地真也[1]

[1]天塩研究林　[2]北管理部

1. 目的

地球上のある特定の地域にしか生息しない希少な地域固有種の生態について深い知見を得ることは、その生物の保護・保全策を講じる手がかりが得られるばかりでなく、周辺地域の生態系の仕組みを理解する糸口や地域住民の郷土愛、時には経済効果といった複数の恩恵が得られる可能性を秘めている。

天塩研究林、中川研究林が位置している北海道北部の蛇紋岩地帯には、おもに崩壊している斜面上を中心にテシオコザクラ(*Primura takedana*)(図 1)、オゼソウ(*Japonolirion osense*)(図 2)という 2 種の希少な多年草が生息している(舘脇,五十嵐 1971)。これら 2 種の存在は周辺地域の住民にも広く知られており(伊藤 2010)、天塩研究林が位置する幌延町ではテシオコザクラが「町の花」に指定されていること(新幌延町史編さん委員会 2000)、2 種の開花期に群生地の見学会が開催されていること(伊藤 2010)から、地域のシンボルとして一定以上の認知があることを示唆している。

しかし、これら 2 種の生態について判明していることは形態(Tatewaki 1928; Nakai 1930)や繁殖様式(津久井 1995; 津久井 1996)、遺伝的な分類(Fuse,Tamura 2000)、ごく限られた区域内での生育条件(Saito 1970)といったミクロな視点の研究や報告に限られており、地域固有種として最も基礎的な情報のひとつである地理的な分布についてはほとんど明らかにされていない。そこで本調査では 2 種のおもな生息地と想定される天塩研究林、中川研究林の 8 本の河川流域において、具体的な分布を明らかにした。

図 1　テシオコザクラ(*Primura takedana*)

図 2　オゼソウ(*Japonolirion osense*)

2. 方法

無雪期の 6 月から 10 月の間に天塩研究林・中川研究林の蛇紋岩地帯を流れる渓流を歩き、規模の大小に関わらず河岸から直接観察できる崩壊地において、テシオコザクラ、オゼソウの生息の有無と地理的な位置を記録した。2 種の生息の有無については崩壊地上に 1 株でも確認されれば「有」と判断した。地理的な位置は GPS(全地球測位システム)端末を用いて記録した。

3. 結果

2 つの研究林を流れる全 8 本の河川流域において合計 309 箇所の崩壊地を観察した(図 3-図 8)結果、テシオコザクラ 88 箇所(全崩壊地の中で 29%)、オゼソウ 44 箇所(全崩壊地のなかで 14%)の生息が確認された。

図 3　渓流沿いの風景(問寒別川支流の中流部)

図 4　渓流沿いの風景(問寒別川支流の上流部)

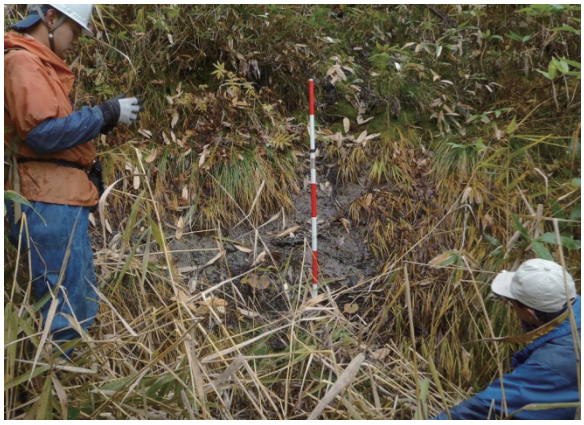

図 5　観察した中で最も規模の小さかった崩壊地
(崩壊地の高さ約 2 メートル)

図 6　観察した中で最も規模の大きかった崩壊地
(崩壊地の高さ 30 メートル以上)

図 7　崩壊地上でテシオコザクラが自生している様子
(白枠内がテシオコザクラの葉)

図 8　崩壊地上でオゼソウが自生している様子
(白枠内がオゼソウの葉と花)

4. 今後の展望

今後は調査対象の地域を広げていき、2 つの研究林内を流れる未踏査の渓流のほか、現実的に入山が可能な周辺自治体を流れる全ての渓流を踏査して更なる情報の蓄積を進める。その後、記録された位置情報を元にして 2 種の詳細な分布図の作成を目指す。また本調査で取得された記録内容を元に、2 種の生息地に関する何らかの地理的なパターンを新たに見出すことができないか探っていく。

テシオコザクラ、オゼソウはいずれも環境省レッドリストに掲載されている絶滅危惧種である(環境省 2014)。これら 2 種の生息場所を不特定多数の目に留まる場へ不用意に公表することは、盗掘や踏み荒らし、収奪的な第三者の利益等が原因で絶滅の危険性が高まる可能性がある。このため当面の間、本調査を通じて得られたデータは教育・研究用途のみでの提供を行うこととし、他の用途での提供については天塩、中川研究林のスタッフや周辺自治体の関係者と慎重な議論を重ねてガイドラインの策定を目指していく。

5. 参考文献

1. 舘脇 操・五十嵐 恒夫, 1971,北大天塩・中川地方演習林の森林植生, 北海道大學農學部演習林研究報告第 28 巻, 1-192
2. 伊藤 欣也, 2010, テシオコザクラの公開, 北方森林保全技術第 28 号, 1-7
3. 新幌延町史編さん委員会, 2000, 新幌延町史
4. Misao Tatewaki, 1928, A new species of Primura from Hokkaido,Japan, J. Jap Bot. 5,8, 29-32
5. T Nakai, 1930, Japonolirion NAKAI, The botanical magazine Tokyo, 44, 22
6. 津久井 孝博, 1995, 日本産蛇紋岩遺存危急種オゼソウのクローン成長パターン, 植物分類・地理 46(1), 67-76
7. 津久井 孝博, 1996, 絶滅危惧種、希少種の繁殖様式の解明と保全方法, 北海道大学農学部技術部研究・技術報告 3, 37-39
8. S Fuse, MN Tamura, 2000, A phylogenetic analysis of the plastid matK gene with emphasis on Melanthiaceae sensu lato, Plant Biol 2, 415-427
9. Shin-ichiro SAITO, 1970, A Study on the Environment of Teshio Primrose(Primura takedana TATEWAKI), 北海道大學農學部演習林研究報告 27(1), 49-62
10. 環境省, 2014, レッドデータブック 2014 8-植物 I(維管束植物) -日本の絶滅のおそれのある野生生物-